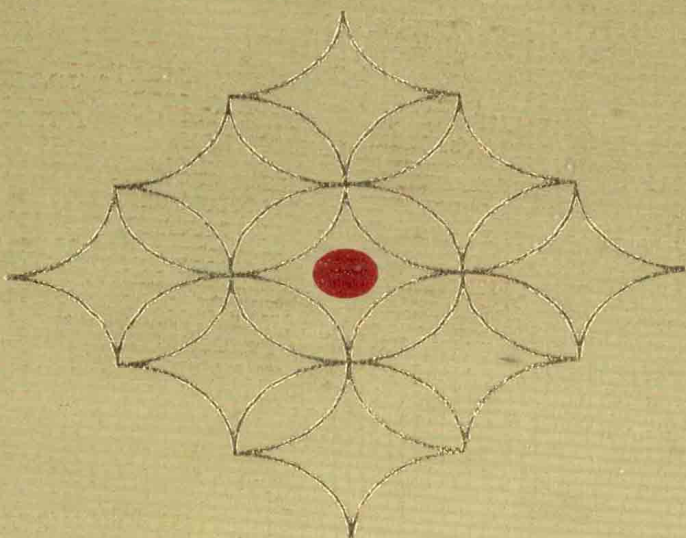




現代日本文學大系

26

北原白秋 集
石川啄木



現代日本文學大系 26

昭和四十七年二月二十五日
昭和四十八年九月二十五日

初版第一刷発行
初版第二刷発行

北原白秋・石川啄木集

著者

発行者

発行所

東京都千代田区神田小川町二ノ八

筑摩書房

郵便番号 一〇一・一九一

電話東京(二九一)七六五一

振替口座東京四一二三

北原白秋
石川啄木
井上達三

印刷株式会社 精興社 製本 株式会社 鈴木製本所

落丁本・乱丁本はお取替いたします

(分類) 0392 (製品) 10026 (出版社) 4604

北原白秋集 目次

卷頭写真
筆蹟

邪宗門

思ひ出

東京景物詩及其他

桐の花

黒檜（抄）

三

四

一八

一四

一五

石川啄木集 目次

卷頭写真
筆蹟

一握の砂

悲しき玩具

あこがれ(抄)

呼子と口笛

鳥影

雲は天才である

我等の一団と彼

一五

三〇

三三

三七

四二

四六

五六

弓町より

三五〇

きれぎれに心に浮んだ感じと回想

三五五

時代閉塞の現状

三六一

明治四十四年 当用日記

三六七

〔付録〕

詩集『邪宗門』を評す

木下杢太郎 三九七

北原白秋の『思ひ出』

高村光太郎 四〇〇

わが愛する詩人・北原白秋

室生犀星 四〇二

北原白秋と松下俊子

鈴木一郎 四〇八

晩年の石川啄木

金田一京助 四一六

啄木に関する断片

中野重治 四二五

啄木の時代的背景

石母田正 四〇

啄木の借金メモ

宮崎郁雨 四四

年譜

四九

著作目録

五七

北原白秋集

華
子

水

子

水

子

子

子

子

子

邪 宗 門

父上に献ぐ

父上、父上ははじめ望み給はざり
しかども、児は蹙にその生れたる
ところにあこがれて、わかき日を
かくは歌ひつづけ候ひぬ。もはや
もはや咎め給はざるべし。

邪 宗 門 扉 銘

ここ過ぎて曲節の惱みのむれに、
ここ過ぎて官能の愉樂のそのに、
ここ過ぎて神経のにがき魔睡に。

詩の生命は暗示にして單なる事象の説明に
は非ず。かの筆にも言語にも言ひ尽し難き
情趣の限なき振動のうちに幽かなる心靈の
歎歎をたづね、縹渺たる音楽の愉樂に憧が
れて自己観想の悲哀に誇る、これわが象徴
の本旨に非ずや。されば我らは神秘を尚び、
夢幻を歎び、そが腐爛したる頽唐の紅を慕
ふ。哀れ、我ら近代邪宗門の徒が夢寐にも

忘れ難きは青白き月光のもとに歎く大理
石の嗟歎也。暗紅にうち濁りたる埃及の濃
霧に苦しめるスフィンクスの瞳也。あるは
また落日のなかに笑へるロマンチツシユの
音楽と幼児磔殺の前後に起る心状の悲しき
叫也。かの黄蠟の腐れたる絶間なき瘰癧と、
オロンの三の絃を擦る嗅覚と、曇硝子に
うち啜ぶウキスキイの鋭き神経と、人間の
脳髓の色したる毒艸の匂深きためいきと、
官能の魔睡の中に疲れ歌ふ鶯の哀愁もさる
ことながら、仄かなる角笛の音に逃れ入る
緋の天鵝絨の手触の棄て難さよ。

昔よりいまに渡り来る黒船縁がつく
れば鱧の餌となる。サンタマリヤ。

「長崎ふり」

例 言

一、本集に収めたる六章約百二十篇の詩は明
治三十九年の四月より同四十一年の臘月
に至る、即最近三年間の所作にして、
集中の大半は殆昨一年の努力に成る。
就中『古酒』中の「よひやみ」「柑子」
「晩秋」の類最も旧くして『魔睡』中に
載せたる「室内庭園」「曇日」の二篇は
その最も新しきものなり。

一、予が真に詩を知り初めたるは僅に此二三
年の事に属す。されば此の間の前後に作
られたる種々の傾向の詩は皆予が初期の
試作たるを免れず。従て本集の編纂に際
しては特に自信ある代表作物のみを精査
し、少年時の長篇五六及その後の新旧作
七十篇の余は遺憾なく割愛したり。この
外百篇に近き『断章』と『思出』五十篇
の著作あれども、紙数の制限上、これら
は他の新しき機会を待ちて出版するの已
むなきに到れり。

一、予が象徴詩は情緒の諸樂と感覚の印象と
を主とす。故に、凡て予が抱る所は僅か
なれども生れて享け得たる自己の感覚と、
刺戟苦き神経の悦樂とにして、かの初め
より情感の妙なる震慄を無みし只冷かな
る思想の概念を求めて強ひて詩を作爲す
るが如きを嫌忌す。されば予が詩を読ま
むとする人にして、之に理知の闡明を尋
ね、幻想なき思想の骨格を求めむとする
は謬れり。要するに予が最近の傾向はか
の内部生活の幽かなる振動のリズムを感
じ、その儘の調律に奏でいんとする音楽
的象徴を専とするが故に、それが表白の
方法に於ても概ねかの新しき自由詩の形
式を用ゐたり。

一、或人の如きは此の如き詩を嘔ひて甚しき
誇張と云ひ、架空なる空想を歌ふものと
做せども、予が幻覚には自ら真に感じた

る官能の根柢あり。且、人の天分にはそれぞれ自らなる相違あり、強ひて自己の感覚を尺度として他を律するは謬なるべし。

一、本来、詩は論ふべきものはあらず。嘗て幾多の譏笑と非議と謂れなき誤解とを蒙りたるにも拘らず、予の単に創作にのみ執して、一語もこれに答ふる所なかりしは、些か自己の所信に安じたればなり。

二、終に、現時の予は文芸上の如何なる結社にも与らず、又、如何なる党派の力をも持む所なき事を明にす。要は只これらの羈絆と掣肘とを放れて、予は予が独自の個性の印象に奔放なる可く、自由ならんことを欲するものなり。

三、尚、本集を世に公にする事を得たる所以のものは、これ一に蒲原有明、鈴木鼓村両氏の深厚なる同情に依る、ここに謹謝す。

明治四十二年一月 著者 識

魔睡

余は内部の世界を熟視めて居る。陰鬱な死の節奏は絶えず快く響き渡る……と神経は一斉に不思議の舞踏をはじめ

る。すすりなく黒き薔薇、歌うたふ硝子のインキ壺、誘惑の色あざやかな猫眼石の腕環、笑ひつづける空眼の老女等はこまかくしなやかな舞踏をいつまでもつづける。余は一心に熟視めて居る……いつか余は朱の房のついた長い剣となつて渠等の内に舞踏つてゐる……

長田秀雄

邪宗門秘曲

われは思ふ、末世の邪宗、切支丹でうすの魔法。

黒船の加比丹を、紅毛の不可思議国を、色赤きびいどろを、句鋭きあんじやべいいる、南蛮の棧留縞を、はた、阿刺吉、珍酩の酒を。目見青きドミニカびとは陀羅尼誦し夢にも語る、

禁制の宗門神を、あるはまた、血に染む聖礫、芥子粒を林檎のごとく見すといふ欺罔の器、波羅韋僧の空をも覗く伸び縮む奇なる眼鏡を。

屋はまた石もて造り、大理石の白き血潮は、ぎやまんの壺に盛られて夜となれば火点るといふ。

かの美しき越歴機の夢は天鵝絨の薫にまじり、珍なる月の世界の鳥獸映像すと聞けり。

あるは聞く、化粧の料は毒草の花よりしぼり腐れたる石の油に画くてふ麻利耶の像よ、はた、羅甸、波爾杜瓦爾らの横つづり青なる仮名は美しくき、さいへ悲しき歓楽の音にかも満つる。

いざさらばわれらに賜へ、幻惑の伴天連尊者、百年を利那に縮め、血の襟背にし死すとも惜しからじ、願ふは極秘、かの奇しき紅の夢、善主鷹、今日を祈に身も霊も薫りこがるる。

四十一年八月

室内庭園

晩春の室内の、暮れなやみ、噴水の水はしたたる……

そのもとにあまりりす赤くほのめき、やはらかにちらばへるヘリオトロオプ。わかき日のなまめきのそのほめき静こころなし。

尽きせざる噴水よ……

黄なる実の熟る草、奇異の香木、その空にはるかなる硝子の青み、外光のそのなごり、鳴ける鶯、

わかき日の薄暮のそのしらべ静こころなし。

いま、黒き天鵝絨の
にほひ、ゆめ、その感触……噴水に纏れた
ゆたひ、

うち湿る革の函、霞ゆる褐色

その空に暮れもかかる空氣の吐息……

わかき日のその夢の香の腐蝕静こころなし。

三層の隅か、さは
腐れたる黄金の縁の中、自鳴鐘の刻み……
ものなべて悩ましさ、盲ひし少女の

あたたかに匂ふかき感覚のゆめ、

わかき日のその霰に音は響く、静こころなし。

晩春の室内、

暮れなやみ、暮れなやみ、噴水の水はしたた

る……

そのもとにあまりりす赤くほのめき、

甘く、またちらほひぬ、ヘリオトロオプ。

わかき日は暮るれども夢はなほ静こころなし。

四十一年十二月

陰影の瞳

夕となればかの思曇硝子をぬけいでて、

廃れし園のなほ甘きときめきの香に顫へつつ、

はや霞え萎ゆる芙蓉花の腐れの紅きものかげ

と、

纏れてやまぬ秦皮の陰影にこそひそみしか。

如何に呼べども静まらぬ瞳に絶えず涙して、

帰るともせず、密やかに、はた、果しなく見

入りぬる。

そこともわかぬ森かげの鬱憂の薄闇に、

ほのかにのこる噴水の青きひとすぢ……

四十一年十月

赤き僧正

邪宗の僧ぞ彷徨へる……瞳据えつつ、

黄昏の葉草園の外光に浮きいでながら、

赤々と毒のほめきの恐怖して、顫ひ戦く

陰影のそこはかとなきおぼろめき

まへに、うしろに……さはあれど、月の光の

水の面なる葦のわか芽に顫ふ時。

あるは、靄ふる遠方の窓の硝子に

ほの青きソロのピアノの咽ぶ時。

瞳据えつつ身動がず、長き僧服

爛壞する暗紅色のにほひしてただ暮れなやむ。

さて在るは、曩に吸ひたる

Hachischの毒のめぐりを待てるにか、

あるは劇しき歓樂の後の魔睡や忍ぶらむ。

手に持つは黒き梟

爛々と眼は光る……

そのすそに蟋蟀の啼く……

四十一年十二月

WHISKY

夕暮のもののあかき空、

その空に百舌啼きしきる。

Whiskyの縁の列

冷やかに拭く少女、

見よ、あかき夕暮の空、

その空に百舌啼きしきる。

四十一年十一月

天鵝絨のにほひ

やはらかに腐れつつゆく暗の室。

その片隅の薄あかり、背にうけて

天鵝絨の赤きふくらみうちかつぎ、

にほふともなく在るとなく、蹲み居れば。

暮れてゆく夏の思と、日向葵の

凋れの甘き香もぞする。……ああ見まもれど

おもむろに悩みまじろふ色の陰影

それともわかぬ……熱病の闇のをのき……

Hachischか、酢か、茴香酒か、くるほしく

溺れしあとの日の疲労……縛れちらばふ
Wagner の恋慕の楽音のゆらぎ
耳かたぶけてうち透かし、在りは在れども。

それらみな素足のものくらがりに
爛壞の光放つとき、そのかなしみの
腐れたる曲の縁を如何にせむ。
君を思ふとのたまひしゆめの言葉も。

わかき日の赤きなやみに織りいでし
にはひ、いろ、ゆめ、おぼろかに嗅ぐとなけ
れど、

ものやはに暮れもかぬれば、わがこころ
天鵞絨深くひきかつぎ、今日も涙す。

四十一年十二月

濃霧

濃霧はそそぐ……腐れたる大理の石の
生くさく吐息するかと蒸し暑く、
はた、冷やかに官能の疲れし光——
月はなほ夜の気囲気の朧なる恐怖に懸る。

濃霧はそそぐ……そこに虫の神経
鋭く、甘く、圧しつぶさるる嗟歎して
飛びもあへなく耽溺のくるひにぞ入る。
薄ら闇、盲啞の院の角硝子暗くかがやく。

濃霧はそそぐ……さながらに戦く窓は
亜利比亜の魔法の館の薄笑。

麻痺薬の酸ゆき香に日ねもす噎せて
聾したる、はた、盲ひたる円頂闇か、壁の中
風。

濃霧はそそぐ……甘く、また、重く、くるし
く、

いづくにか凋れし花の息づまり、
苑のあたりの泥濘に落ちし燕や、
月の色半死の生に悩むごとただかき曇る。

濃霧はそそぐ……いつしかに虫も盲ひつつ
聾したる光のそこにうち痺れ、

啞とぞなる。そのときにひとつの硝子
幽魂の如くに青くおぼろめき、ピアノ鳴りい
づ。

濃霧はそそぐ……数の、見よ、人かげうごき、
闇くる夜の恐怖か、痛きわななきに
ただかいさぐる手のさばき——霊の弾奏、
盲目弾き、啞と聾者円ら眼に重なり覗く。

濃霧はそそぐ……声もなき声の密語や。

官能の疲れにまじるすすりなき
霊の震慄の音も甘く聾しゆきつつ、
ちかき野に喉絞めらるる淫れ女のゆるき瘰癧。

濃霧はそそぐ……香の腐蝕、肉の衰頹、——

呼吸深く囁囁仿謨や吸ひ入るる
朧たる暑き夜の魔睡……重く、いみじく、
音もなき盲啞の院の気囲氣に月はしたたる。

四十一年十月

赤き花の魔睡

日は真昼、ものあたたかに光素の
波動は甘く、また、緩るく、戸に照りかへす、
その濁る硝子のなかに音もなく、
囁囁仿謨の香ぞ滴る……毒の謔言……

遠くきく、電車のきしり……
……棄てられし水薬のゆめ……

やはらかき猫の柔毛と、蹠の
ふくらのしろみ悩ましく過ぎゆく時よ。
窓の下、生の痛苦に只赤く戦ぎえたてぬ草の

花
亜鉛の管の
湿りたる算のすそに……いまし魔睡す……

四十一年十二月

麦の香

嬰兒泣く……麦の香の湿るあなたに、
続け泣く……やはらかに、なやましげにも、

香に噎び、香に噎び、あはれまた、嬰兒泣きたつ……

夏の雨さと降り過ぎて

新にもかをり蒸す野の畑いくつ湿るあなたに、赤き衣一きは若く、にはやかにけふる揺籃や、磨硝子、あるは窓枠、濡れ濡れて夕日さしそふ。

四十一年十二月

曇 日

曇日の空気のなかに、狂ひいづる樟の芽の鬱憂よ……

そのもとに桐は咲く。

Whiskyの香のごときしほき、かなしみ……

そこここにいぎたなき駱駝の寢息、

見よ、鈍き綿羊の色のごれに

饑えて病む藁のくさみ、

その湿る泥濘に花はこぼれて

紫の薄き色鋭になげく……

はた、空のわか葉の威圧。

いづこにか、またもきけかし。

餌に饑えしペリカンのけうとき叫、

山猫のものさやぎ、なげく鶯、

腐れゆく沼の水蒸すがごとくに。

そのなかに桐は散る……Whiskyの強きかなしみ……

もの甘き風のまた生あたたかさ、

猥らなる獣らの囀内のあゆみ、

のろのろと枝に下るなまけもの、あるは、貧しく

眼を握えて毛虫喙む嗟歎のほろほろ鳥よ。

そのもとに花はちる……桐のむらさき……

かくしてや日は暮れむ、ああひと日。

病院を逃れ来し患者の恐怖、

赤子らの眼のなやみ、笑ふ黒奴、

酔ひ痴れし遊蕩児の縦覧のとりとめもなく。

その空に桐はちる……新しきしほき、かなしみ……

はたや、また、園の外ゆく

軍樂の黒き不安の壊れ落ち、夜に入る時よ、

やるせなく騒ぎいでぬる鳥獸。

また、その中に、

狂ひいづる北極熊の氷なす戦慄の声。

その闇に花はちる……Whiskyの香の頻吹

……桐の紫……

四十一年十二月

秋の瞳

晩秋の濡れにたる鉄柵のうへに、
黄なる葉の河やなぎはつれてなげく
やはらかに葬送のうれひかなでて、
過ぎゆきしTrombone いづちにけむ。

はやも見よ、暮れはてし吊橋のすそ、
瓦斯点……いぎたなき馬の吐息や、
騒ぎやみし曲馬師の樂屋なる幕の青みを
ほのかにも掲げつつ。水の面見る女の瞳。

四十一年十二月

空に真赤な

空に真赤な雲のいろ。

玻璃に真赤な酒のいろ。

なんでこの身が悲しかる。

空に真赤な雲のいろ。

四十一年五月

秋のをはり

腐れたる林檎のいろに
なほ青きにはひちらぼひ、

水薬の汚みし卓に
瓦斯焔炉ほのかに燃ゆる。

病人は肌をさめて

愁はしくさしぐむごとし。

何ぞ湿る、医局のゆふべ、

見よ、ほめく劇薬もあり。

色冴えぬ室にはあれど、

声たててほのかに燃ゆる

瓦斯焔炉……空と、こころと、

硝子戸に鈍ばむさびし。

しかはあれど、寒きはほに

黄の入日さしそふみぎり、

朽ちはてし秋の平オロン

はそぼそとうめきたてぬる。

四十一年十二月

十月の顔

顔なほ赤し……うち曇り黄ばめる夕、

「十月」は熱を病みしか、疲れしか、

濁れる河岸の磨硝子背に凭りかかり、

霧の中、入日のあとの河の面をただうち眺む。

そことなき櫂のうれひの音の刻み……

涙のしづく……頬にもまたゆるきなげきや

ややありて麴包の破片を手にも取り、

さは冷やかに噛みしめて、来るべき日の

味もなき悲しきゆめをおもふとき……

なほもまた廉き石油の香に噎び、

腐れちらばふ骸炭に足も汚れて、

小蒸汽の灰ばみ過ぎし船腹に

一きは赤く輝やきしかの窓枠を忍ぶとき……

月光ははやもさめさめ……涙さめさめ……

十月の暮れし片頬を

ほのかにもうつしだいしぬ。

四十一年十二月

接吻の時

薄暮か、

日のあさあけか、

昼か、はた、

ゆめの夜半にか。

そはえもわかね、燃えわたる若き命の眩暈、

赤き震慄の接吻にひとと身顫ふ一刹那。

あな、見よ、青き太月は西よりのぼり、

あなや、また瘡病む終の顫して

東へ落つる日の光、

大ぞらに星はなげかひ、
青く首ひし水面には薬香にほふ。

あはれ、また、わが立つ野辺の草は皆色も干

乾び、

折り伏せる人の骸の夜のうめき、

人霊色の

木の列は、あなや、わが挽歌うたふ。

かくて、はや落穂ひろひの農人が寒き瞳よ。

歓楽の穂のひとつだに残さじと、

はた、刈り入るる鎌の刃の痛き光よ。

野のすゑに獣らわらひ、

血に饑えて汽車鳴き過ぐる。

あなあはれ、あなあはれ、

二人がほかの霊のありとあらゆるその咒詛。

朝明か、

死の薄暮か、

昼か、なほ生れもせぬ日か、

はた、いづれともあらばあれ。

われら知る赤き唇。

四十一年六月

濁江の空

腐れたる林檎の如き日のほひ
 円らに、さあれ、光なく甘げに沈む
 晩春の濁重たき霽の内、
 ふと、カキ色の軽気球くだるけはひす。

遠方の曇れる都市の屋根の色
 たゆげに仰ぐ人はいま鈍くもきかむ、
 濁江のねぶたき、あるは、やや赤き
 にほひの空のいづこにか洩るる鉄の音。

なやましき、さは江の泥の沈澱より
 あかるともなき灰紅の帆のふくらみに
 伝へくる潜水夫が作業にか、
 饅えたる吐息そこはかと水面に黄ばむ。

河岸になほ物見る子らはうづくまり、
 はや倦ましげに人形をそが手に泣かす。
 日暮とき、入日に濁る霽の内、
 また、ふくらかに軽気球くだるけはひす。

四十一年八月

魔国のたそがれ

うち曇る暗紅色の大きな日の
 魔法の国に病ましげの笑して入れば、
 もの甘き驢馬の鳴く音にもよはされ、
 このもかのもに悩ましき吐息ぞおこる。

そのかみの激しき夢や忍ぶらむ。
 鬱金の百合は血ににじむ眸をつぶり、
 人間の声して挑み、飛びかはし
 鸚鵡の鳥はかなしげに翹ふるはす。

草も木もかの誘惑に化されつる
 旅のわかうど、暮れ行けば心ひまなく
 えもわかぬ毒の怨言になやまされ、
 われと悲しき歓楽に怕れて顫ふ。

日は沈み、たそがれどきの空の色
 青き魔薬の薫して古りつつゆけば、
 ほのかにも誘はれ来る隊商の
 鈴鳴る……あはれ、今日もまた恐怖の予報。

はとばかり黙み戦くものの息。
 色天鵝絨を擦るごとき裳裾のほかは
 声もなく甘く重たき霽の闇、
 はやも王女の領らすべき夜とこそなりぬ。

四十一年八月

蜜の室

薄暮の潤みににぎれる室の内、
 甘くも腐る百合の蜜、はた、霽ぼかし
 色赤きいんくの罎のかたちして
 ひそかに点る豆らんぶ息づみ曇る。

「豊国」のぼやけし似顔生ぬるく、
 雲硝子の窓のそと外光なやむ。
 ものの本、あるはちらばふ日のなげき、
 暮れもなやめる霊の金字のほひ。

接吻の長き甘さに倦きぬらむ。
 そと手をほどき霽の内さぐる心地に、
 色首の瞳の女うらまどひ、
 病めるペリカンいま遠き湿地になげく。

かかるとき、おぼめき摩る Violon の
 なやみの絃の手触のほひの重さ。
 鈍き毛の絨毯に甘き蜜の闇
 澁み饅えつつ……血のごともらんぶは消ゆる。

四十一年八月

酒と煙草に

酒と煙草にうつとりと、
 倦めるころを見まもれば、
 それとしもなき霊のいろ
 曇りながらに泣きいづる。

なにか嘆かむ、うきうきと、
 三味に燥やぐわがころ。
 なにか嘆かむ、さいへ、また
 霊はしくしく泣きいづる。

四十一年五月

鈴の音

日は赤し、窓の上に恐怖の鳥
ひた黙み暮れかかる砂漠を熟視む。

今日もまたもの鈍き駱駝をつらね、
一群のわがやから消えさりゆきぬ。
もの甘き鈴の音、ああそを聴けよ。

からら、からら、ら、ら、ら……

暮れのこるピラミドの暗紅色よ。
そが空のうち濁る重き空気よ。

いづこにか月の色ほのめくごとし。

からら、からら、ら、ら、ら……

かの群よ、靄ふかく、いまかひろぐる
色鈍き、幽薺の毛織の天幕。

駱駝らのためいきもそこはかとなく。

からら、からら、ら、ら、ら……

もの青く暮れてみな蒸しも見わかぬ。
簾え温るむ空のをち、薄らあかりに、
ほのかにも此方見るスフィックスの瞳。

からら、からら、ら、ら、ら……

あはれ、その静かなるスフィックスの瞳。
ああ暗示……えもわかぬ夢の象徴。

またくいま埃及の夜とやなるらむ。

からら、からら、ら、ら、ら……

鳥いまはたはたと遠く飛び去り、
窓にただ色あかき燈火点る。

四十一年八月

夢の奥

ほのかにもやはらかきにはひの園生。

あはれ、そのゆめの奥。日と夜のあはひ。

薄あかる空の色ひそかに顫ひ

暮れもゆくそのしばし、声なく立てる

真白なる大理石の男の像

微妙じくもまた實に瞑目りながら

清らなる面の色かすかにゆめむ。

ものなべてさは妙に女の眼ざし

あはれそが夢ふかき空色しつつ、

にはやかにやましの思はうるむ。

そがなかに埋もれたる素馨のなげき、

蒸し甘き沈丁のあるは刺せども

なほどの香の痛み身にしておぼえむ。

わかうどは声もなし、清く、かなしく。

薄暮にせきもあへぬ女の吐息

あはれその愁如し、しぶく噴水

そことなう節ゆるうゆらゆるなべに、

いつしかとほのめきぬ月の光も。

その空に、その苑に、ほのの青みに

静かなる歎歎泣きもいでつつ、

いづくにか、さまだるる愛慕のなげき。

やはらかきほの熱る女の足音

あはれそのほめき如し、燃えも生れゆく

ゆめにほふ心音のうつつなきかな。

大理石の身の白み、面もほのかに、

ひらきゆくその眼ざし、なかば閉ぢつつ、

ゆめのごと空仰ぎ、いまだ見惚るる。

色わかき夜の星、うるむ紅。

四十一年七月

窓

かかる窓ありとも知らず、昨日まで過ぎし河

岸。

今日は見よ、

色赤き花に日の照り、かなしくも依依児匂ふ。

あはれまた病める Piano も……

四十一年九月

昨日と今日と

わかうどのせはしさよ。

さは昨日世をも厭ひて重格魯密母求めも泣き